

---

# 紅い私と血の歌を

清聖 ひな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅い私と血の歌を

### 【Nコード】

N8657Y

### 【作者名】

清聖 ひな

### 【あらすじ】

私だよ？覚えてるよね？

ねえ、早く。早く。願いをかなえさせてよ。

キミがいて、私がいて、他はなにもいらない。

君がいて、私がいて、他は・・・すべて消し去ろうか。

## 第1話

ねえ・・・私。私だよ。

もっと愛して。ねえ、もっとあなたを求めるわ。

「ん~~~~疲れたあ〜」

私はまるですべてを投げ捨てるかのように大きく手をあげた。

「もう嫌〜私、日本人だから英語なんてしらねえ〜」

私は赤崎花蓮。あかざきかれん

高校2年。馬鹿のぶんるい分類だろう。

「そんな外見なのに英語苦手とかw」

こいつは小河大我おがわたいが

私の親友。腐れ縁というやつだ。

「別に好きでこんな外見してるわけじゃないもん」

「知ってるよw花蓮の髪の色ってホント綺麗だよなあ。」

ホントはこの外見が好きだ。

特に髪の色が好きだ。大我が褒めてくれるこの髪の色が好き……。

「私は大我の髪の色も好きだよ？」

「そうか？こんなただの黒……。」

「そんなこと無い！黒く見えるけど……よく見ると違う色も混じってて好き」

「そうか？俺は花蓮の髪の色の方が好きだけどな……。」

……ただの髪の色の話。

。だけどうしてこんなに好きって言うのは恥ずかしいんだろう……。

……。だけどうしてこんなに好きって言うてもらうのは嬉しいんだろう……。

キーンコーンカーンコーン

授業が終った。

さあ、帰ろう。

男子と戯たわむれている大我を少し見て、教室を出る。

「バイバイ」言わない。

でも、心で伝える。

まあ、ただの自己満足。

放課後の部活なんて無視して帰る。

ちなみに私は合唱部だ。

部員が少ないからという理由で入らされたただけだ。

別に歌うのは嫌いではない。

でも、人と群れてなにかやるのは向いていないのだろう。

さあ、家に帰ろう

ガチャッ

家のドアを開ける。

靴がない。

いつもの事だ。まだ、親は帰ってきていない。

私の親は共働きだ。忙しいらしい。

ホントは、お互いに不倫している。

ちゃんとした証拠があるわけではないけど……。

この前、外を歩いていて見てしまったのは父親の不倫現場。

会社の後輩かなにかだろう。

母親とは違った、「女の子」という言葉が似合う子。

2人で抱き合いながら。父親は何を考えていたのだろう。

母親にいたっては、家に連れてきている。

父親とはちがう。「かつこいい」誰が見てもそうだろう。

きっとホストか何かだろう。

2人でキスしながら母親は何を考えたの？

少なくとも私の両親は自分の事しか考えていないのだろう。

階段を上り、自分の部屋に入る。

殺風景さつぷうけいそんな言葉が似合うだろう。

机、イス、鏡。それ以外には家具がない。

私の外見を見て、イメージする部屋はどんな部屋なのだろう。

この部屋と正反対だろうな。と考える。

鏡の前に立つ。

制服はブレザーだ。

白色のシャツ。水色、ピンク、黄色のチェックのスカート。同じ生地のリボン。茶色のジャケット。

黒のハイソックス。

私の学校の制服は可愛いと思う。

でも、その制服が脇役に感じてしまっくらの存在感。

昔から大嫌いだった。

このせいで、目立った。このせいで、差別された。

でも、このおかげで大我に褒められた。

どんな服を着ても目立つ。

圧倒的な存在感。

肩まで伸びた髪は紅く、燃えるような色だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8657y/>

---

紅い私と血の歌を

2011年11月25日23時51分発行